

2023年度図書館主催展覧会報告

1 蔵書票、蔵書印、書き込み： 図書館に遺された所有の証

会 期：2023年10月2日(月)～11月9日(木)

会 場：総合学術情報センター2階 展示室

早稲田大学図書館の蔵書は、支払いさえ行えば誰でも購入できる新刊本だけでなく、古書市場や寄贈といった、折々の代え難いご縁によって構築されてきた。2023年度秋季企画展では、紆余曲折を経て当館の蔵書となった資料のうち、旧蔵者の「蔵書票」「蔵書印」「書き込み」を残すものを取り上げ、4章構成で現物資料67点、パネル資料19点を出展した。



ポスターデザイン

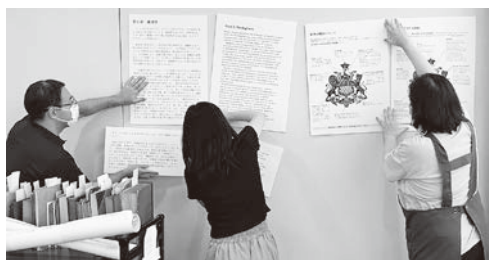
第1章 蔵書票／第2章 蔵書印／第3章 書き込み／
第4章 早稲田大学関連

各章の冒頭では、痕跡毎の特性や歴史をまとめたうえで、各資料の出自を含む解説を加えた。美しくユニークな見た目を楽しんでもらうと同時に、各痕跡の有する歴史やその意味に触れることで、学びの機会を提供したいとの意図であった。



展示室の様子

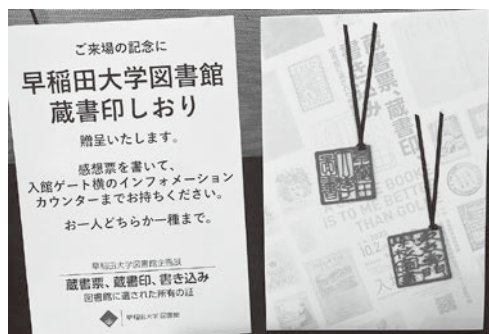
全章を通して、来歴や旧蔵者情報の調査は、展示委員が一から手探りで行った。少ない手掛りから旧蔵者や年代を突き止めていく過程は骨が折れるものではあったが、解説を作成するうえで書誌学的な基礎教養を学ぶことができたこと、また、調査活動におけるデジタルデータの重要性を主体として痛感するとともに、「自蔵書のデータ整備が国内外の研究・教育支援に繋がる」ことの大学図書館の責任について改めて考える機会を得られたことは、図書館員として有意義な経験であったと考える。



解説パネル設置の様子

本展で特筆すべきは、本展資料の9割以上が、稀観書の入る閉架書庫ではなく、利用者の出入りがある開架書庫（研究書庫）からの出陳であったことである。利用者が直接手に取って資料を確認する環境が整備されていることを館外へアピールするとともに、若手の館員にとって蔵書構築の奥深さが伝わる展示となればと考えた。

今回展示委員会初の試みとして、来場記念のノベルティを作成した。ノベルティの配付に際して、アンケート回答をお願いすることで、これまで可視化されづかった来場者データや展示の感想を把握することができたことも、本展の収穫であったと言える。



来場記念ノベルティ

国立国会図書館の「Current Awareness Portal」や、文学通信のXアカウントでも取り上げていただいたこともあり、開室日数34日の総来場者数は4,170名（延べ数）であった。本展が、来場者にとって「図書館で紙の本を手取る楽しさ」を思い出す場となったことを願う。

本展のバーチャルミュージアム：

<https://archive.waseda.jp/?clp=uIphN>

2

住吉広行「春冬堂上放鷹之図」屏風
～下絵からよみがえる、
朝鮮王朝への贈りもの～

会 期：2024年3月22日(金)～4月30日(火)

会 場：総合学術情報センター2階 展示室

今回は、当館所蔵の住吉広行筆「春冬堂上放鷹之図」春図下絵を中心に、3つのテーマに分けて紹介した。

展示の構成は、次のとおりである。

■テーマ1 「春冬堂上放鷹之図」春図下絵の全面公開および彩色再現の試み

まず、春図下絵の全面公開と、記録に残されている制作にまつわる経緯について紹介した。

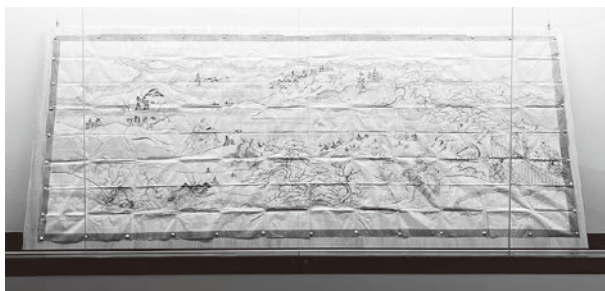
続いて、下絵の部分的彩色再現と3Dモデルの作成の試みを紹介した。彩色再現は、高精細画像から読み取った指示書きと、広行による本屏風の記録である「御屏風之記」(宮内庁書陵部所蔵)の内容を照らし合わせ、画題や有職故実の資料をもとにデジタル彩色での再現をした。屏風の3Dモデルは、下絵を屏風の形に当てはめ、3Dモデリングを作成し、正面や斜めなど様々な角度から見た場合を再現した。

■テーマ2 住吉広行と「やまと絵」の系譜 一土佐派・住吉派・板谷派一

屏風の作者である住吉広行の経歴や業績と「やまと絵」と言われる土佐派・住吉派・板谷派の系譜を、広行の自筆や各画派の作とともに紹介した。

■テーマ3 朝鮮通信使にみる江戸幕府の外交

本屏風の完成品が、江戸時代最後の第12回朝鮮通信使



大判下絵の展示



彩色と3Dモデルでの再現展示

来聘時の「贈朝屏風」であること、江戸幕府と朝鮮王朝との交流が2017年10月にユネスコ「世界の記憶」《朝鮮通信使に関する記録》へ登録されたことから、幕府と朝鮮王朝との外交などを所蔵資料から紹介した。

このほか、下絵の実物と高精細画像を同時に見られるようにIIIF規格でオンライン公開をした。また新型コロナの5類移行にともない行動制限が解除されたことから、ギャラリートークを2回(4/16、4/23)実施した。



ギャラリートークのようす

広報は、紙媒体ではチラシは両面カラーで作成するとともに、展示紹介パンフレットを配布した。オンラインでは図書館HPと同SNSで積極的に展開するとともに、外部のイベント配信システムを使い、約30のイベント紹介サイトに掲載された。

開室日数34日の総来場者数はおよそ3,140名(延べ数)であった。美術史をはじめ各テーマの専門家の関心を引いたようで、学内外の研究者が学生を引率し来場した時や、展示を見た学生が質問のため特別資料室に来た時は、展示委員が解説をした。また博物館の学芸員は大判下絵の展示方法に注目をした。このほかアンケートの回答、SNSでの本展の感想、ギャラリートークでの質疑から、来場者の視点でさまざまなコメントが得られたことが興味深い。

なにより、本展が研究者同士や授業での利活用に繋がったことは、大学図書館の展示としての役割を果たせたと考える。



チラシデザイン